

日本海員組合 昭和七年 大會

(昭和七年五月七日)

宣言

日本海員組合昭和七年度大會に於て、我等は茲に全海上大衆に向つて左の如く宣す。

顧みれば過去十一年に亘る闘争の歴史を通じて、我等は最も憂鬱にして多難なる體験を、最近の一年に於て特に深刻に味ははしめられたのである。

没落の斷崖に臨みながら、尙最後のシャイネストック式餘喘を保つ第三期資本主義は、その臨終期に於ける必死的努力を、プロレタリアに對する最後の搾取と虐使の上に發見した。

産業資本に對する金融資本の統制重壓は、産業合理化運動を通じて無產階級の生活苦を加重し、大衆の購買力減退並に關稅の高騰等は、資本主義の自由主義的伸長、國際主義的發展を阻害した。かくして資本主義は遂に怖るべき内部矛盾と自己否定の絶壁に當面するに至つた。

「階級を超えて國民的利益を守れ」等の標語は、自壊自滅の最後の段階に達せる資本主義の延命的退却を掩護する煙幕なりと我等は斷するのである。

我等はこの資本主義の末期的資本主義の一連環たる日本の資本主義に於てこれを見る。金輸出再禁止を好機とする四資り弗買ひによつて、不當不正の暴利を博せる金融資本、苛酷なる搾取と重壓を海運業者に強くる船舶保險業者、並びにこれ等の暴状に對して何等の統制も管理も爲し能はざる政府の現狀を見るとき、我等はこの前代未聞の難局を開出し、我等の最後の生存権を死守する爲には、組織労働者の團結以外、何物もなき事を痛感するものである。

我等が過去二ヶ年に亘つて、組合基金中より十數萬圓を支出して、未だ曾つて如何なる労働團體によつても企圖せられざりし授産所の自營により、數千の失業海員を救濟しつゝある事は、雄辯にこれを物語るものである。更に又資本の全面的且組織的攻勢に對し、未だ曾てこれに對抗すべき全國的且有機的提携をもたらし我國無產階級の陣營を統整理する事の急務を痛感せる我等の主唱の下に、昨年遂に日本労働俱樂部が結成せられたる事も、一に我等のもつて理想の表現に外ならないのである。

然るに最近に於て彼の滿営問題を櫻機として、毅然たる階級的信念を忘却し、反動フツシヨ的勢力と結ばんとする一派が、我等の陣營内に於て、無產階級の分裂と混亂を誘發しつゝある事は、極めて遺憾なる現象である。

今や我等は經濟的に又思想的に極めて重大なる解放運動の危機に當面しつゝある事を認識するものである。此の重大時期に於ける我等の指針は、依然として、組合創立の精神を嚴守する以外に何ものもなき事を確信する。即ち

「我國の國情國民性に立脚し、労働者の實感に觸るゝ現實の問題を、その實生活に適應するやう、主として經濟的方法を以てこれを解決する事」

これである。この創立の精神は本組合の對國家觀、對國民觀、對政治運動觀、對國際主義觀を端的に又雄辯に物語るものである。

今や我等は多難にして艱鉗なる一年を送り、又恐らく過去に於けるが如き一年を迎へんとするに當り我等は親愛なる同志諸君と共に左の如く誓はんとする。

我等は一切の流行的乃至日和見的主義及方針を排し、過去十一年に亘り我等のとり來れる堅實なる労働組合主義を以て、内に於ては一步々々其勞働條件の改善を進むと共に、外に向つては日本労働俱樂部の發展的組織並に健實なる無產政黨運動を進じて、被搾取階級、被支配階級の組織化闘争化に精進すべき事を。

昭和七年五月七日

日本海員組合